

◎家畜伝染病の防疫対策にしっかりと取り組もう。
◎家畜の暑熱対策に取り組むとともに、適切な飼料給与と害虫対策を実施しよう。

乳用牛

1 生乳の品質管理

J A全農あおもり牛乳冷却処理所が月2回検査している出荷乳の乳成分、乳質データをチェックし、乳脂肪率 3.5%以上、無脂固形分率 8.3%以上、体細胞数 20 万/㎖未満、細菌数 5 万/㎖未満の基準を満たすよう、以下の点に留意して良質な生乳生産を心がける。

(1) 乳脂肪率

夏季の暑熱ストレス等で粗飼料の採食量が減少すると、乳脂肪率は大きく低下するため注意する。乳脂肪率が低い場合は、良質な粗飼料を給与するとともに、涼しい夜間や早朝の給与割合を増やす。

また、飲水量の低下は採食量の減少に直結するので、給水機器の水量が確保されていることを定期的にチェックするとともに、清潔な状態を保つ。

(2) 無脂固形分率

エネルギーが不足すると無脂固形分率は低下するので注意する。特に、泌乳初期は泌乳量に見合うだけのエネルギー量を確保するのが難しいため、消化が良い粗飼料を十分に採食していることを確認しながら濃厚飼料を増やすなど、エネルギーの充足度の指標となる乳蛋白質率を活用して給与飼料の構成を調整する。

(3) 体細胞数

体細胞数が増加している場合は、早期に各個体の状況をチェックし、乳房炎に罹患した牛がいる場合は治療を行うとともに、ライナーゴムなど搾乳機器に異常がないか確認する。特に、暑熱ストレスで免疫力が低下する時期は、ビタミン類が不足しないように注意する。

なお、乳房炎軟膏による治療は、獣医師の指示に従い、完治するまで行う。休薬期間後は必ず抗生物質の残留検査を依頼し、確認後に出荷する。

(4) 細菌数

搾乳機器の洗浄・殺菌不良やバルククーラーの管理不十分が原因で増加することが多いので、日頃の洗浄・殺菌作業を再点検するとともに、盛夏前には必ずバルククーラーの定期点検を実施する。

1 夏季の飼育管理

(1) 温度や湿度の対策

牛舎内の風通しをよくし、送風機を牛体に風が当たる角度へ調整、送風効率を上げ

るためのファンの掃除を行う。また、牛舎内の温度上昇防止には西側の直射日光を避けるための日よけを設置する。

(2) 飼料給与

採食量を確保するため、新鮮な水を十分に摂取させる。そのため、ウォーターカップ等の飲水設備は常に清潔に保つ。また、夏季はミネラルの要求量が増加するので、鉱塩等は十分な量を設置するほか、飼料中のミネラル含量を高める。

肉用牛

1 小型ピロプラズマ病の予防

(1) 小型ピロプラズマ病とは

ア 牛に寄生するダニが媒介する代表的な放牧病の一つで、牛の赤血球の中に寄生する小型ピロプラズマ原虫が原因である。

イ 発病すると、牛は貧血状態で、元気がなくなり、食欲不振が見られる。また、眼結膜や外陰部の粘膜が白くなり、更に悪化すると黄色くなって、黄疸が見られるようになる。重症の場合は死亡することもある。

ウ 過去に感染したことがある牛は、免疫により再感染しても発症しにくくなるが、初めて放牧する牛は免疫がないので注意が必要である。免疫のない牛が感染した場合は、年齢に関係なく症状が重くなり、流産、死亡することがある。

(2) 予防方法

ア この病気を媒介するダニを駆除するため、放牧場のダニの汚染度に合わせて3週間から4週間に1回程度、放牧場のダニの汚染度に合わせて殺ダニ剤を使用する。牛の体表に塗るタイプ（プアオン法）のダニ駆除剤が市販されているので、初めて放牧する牛だけでなく、全ての放牧牛に規定量を使用する。詳しい使用方法是家畜保健衛生所へ相談する。

ダニが主に吸血するのは、まぶた、耳、内股などの皮膚が比較的薄い部位であるため、薬剤がこれらの部位まで広がるように、頭部から背線に沿って尾根部まで確実に塗る。

ダニが吸血しやすい部位（耳、まぶたなど）

頭部に確実に塗る



尾根部に確実に塗る

ダニが吸血しやすい部位（外陰部から内股にかけて）



イ この病気は、放牧によるストレスで発症しやすくなるので、放牧前には昼夜パドックに出して寒暖差に慣らし、青草を給与するなどの放牧馴致（予備放牧）を行うことが大切である。

ウ 放牧中は、初めて放牧する牛（県外導入の育成牛なども含む）を特に注意して監視し、家畜保健衛生所の定期検査を受ける。異常が見られた場合は、速やかに退牧させ治療する。

2 温度や湿度の対策

牛舎には湿気がこもらないように、窓の開放や換気扇により十分な換気を行うとともに、通風を妨げるような資材や機材等は置かないようにする。

遮光ネットの設置、屋根への白い塗料や石灰乳の塗布は、牛舎内温度の上昇を抑制できる。牛舎内外や牛体への直接の散水も効果的である。

豚

1 衛生管理

本県では、これまでに野生イノシシにおける豚熱感染が14件確認されたことから「飼養衛生管理基準」を遵守し、特に次のことを徹底する。

- (1) 部外者や車両の農場立入りは原則として禁止し、衛生管理区域への出入りが必要な場合には車両を含め消毒を徹底する。
- (2) 病原体を豚舎内に持ち込まないようにするため、豚舎出入口に消毒設備を設置し、出入の際の手指の洗浄及び消毒に加え、踏込み消毒槽を設置し、消毒を徹底するとともに、豚舎ごとに専用の作業衣・靴を着用する。
- (3) 農場内へのいのしし等の野生動物の侵入や接触の防止を徹底するため、防護柵の破損部は速やかに修理するとともに、排せつ物等が飼料や飲水に混入しないようにする。
- (4) 日常の観察を徹底し、異常豚の早期発見に努めるとともに、発見した場合は、速やかに家畜保健衛生所に連絡し指導を受ける。

2 繁殖豚の飼育管理

(1) 育成期間

授乳期間中の飼料の増給に対応できるよう、過肥に注意しながら育成する。また、群飼では、食いムラによる過肥や発育不良が出るため、頭数に見合った給餌スペースの確保や給餌回数の増に努める。

(2) 交配前後

ア 未経産豚への交配時期の目安は、2回目以降の発情で生後8か月齢、体重130 kgとなった時点とする。

イ 経産豚については、離乳当日は2 kg程度を給餌し、その後、発情回帰まで、授乳中の体力消耗程度に応じて飼料給与量を増やす。ただし、発情回帰が遅れている豚は過肥に注意する。

ウ 交配後4日間は、受精卵の損耗を防ぐために飼料給与量を減らす。

(3) 妊娠期間

ア 連産性を高めるため、BCSに注意する。初産から3産目までの豚ではやせすぎに、4産目以降の豚では過肥に気を付けて栄養管理を行う。

イ 基準体重に満たない未経産豚や体力が回復しない経産豚には、妊娠前期に飼料の増給が必要となるが、過度な給与はしない。

ウ 離乳時にやせすぎた豚には、妊娠中期から後期に飼料を増給し、目標とする分娩時体重を目指す。

(4) 授乳期間

エネルギー含量の高い授乳期用の飼料を不断給餌し、離乳時の体重減少量を7kg程度にとどめることにより、次の発情回帰の遅延を防ぐ。

3 肉豚の飼育管理

(1) 飼育管理

ア 軟脂豚やむれ肉は、気温の高い夏季に発生しやすいので、豚舎内の温度管理に注意する。

イ 軟脂豚は不飽和脂肪酸の多い飼料給与が原因で発生することが多いので、飼料給与体系に基づき日齢や体重に合った飼料を給与する。

ウ むれ肉などの異常肉はストレスによっても発生するため、適正な飼育密度を保つとともに、出荷時はできるだけ丁寧に扱い、ストレスを軽減させる。

(2) 出荷時体重

出荷時の体重は108～122kgを目標とし、上物（枝肉重量68～83kg）率の向上に努める。

鶏

1 衛生管理

昨シーズン、全国で高病原性鳥インフルエンザが24件発生し、うち1件が本県での発生であったことから「飼養衛生管理基準」を遵守し、特に次のことに心掛ける。

(1) 部外者や車両の農場立入りは原則として禁止し、衛生管理区域への出入りが必要な場合には車両を含め消毒を徹底する。

(2) 病原体を鶏舎内に持ち込まないようにするため、鶏舎出入口に消毒設備を設置し、出入の際の手指の洗浄及び消毒に加え、踏込み消毒槽を設置し、消毒を徹底するとともに、鶏舎ごとに専用の作業衣・靴を着用する。

(3) 鶏舎への野生動物の侵入防止を徹底するため、鶏舎の破損部は速やかに修理するとともに、開放部分には網目の隙間が2cm以下の防鳥ネット等を設置する。また、農場敷地内のため池や堆肥場等については、防鳥ネットや忌避テープ等の野鳥の飛来防止対策を講じるほか、野生動物の排せつ物等が飼料や飲水に混入しないようにする。

(4) 日常の観察を徹底し、異常鶏の早期発見に努めるとともに、発見した場合は、速やかに家畜保健衛生所に連絡し指導を受ける。

2 青森シャモロックの飼育管理

- (1) 初期発育を速め、肉付きを良くするため、餌付けから27日齢までのひなには、青森シャモロック用前期飼料または下表に示すタンパク質割合やエネルギーレベルの肉用鶏専用配合飼料を不断給餌する。
- (2) 28日齢以降は、過剰な脂肪付着を防ぐため、青森シャモロック用後期飼料または下表に示すタンパク質割合やエネルギーレベルの肉用鶏専用配合飼料を不断給餌する。
- (3) 出荷2週間前（雌雄同群飼いの場合は85日齢以降）から飼料にニンニク粉末を0.3%添加して給与する。

表 青森シャモロックの飼料給与法

給与期間	給 与 飼 料
餌付け～27日齢	タンパク質 20%以上、代謝エネルギー3,000kcal/kg 以上の肉用鶏専用配合飼料（抗菌性飼料添加物を含まないもの）
28日齢～出荷	タンパク質 16%以上、代謝エネルギー2,900kcal/kg 以上の肉用鶏専用配合飼料（抗菌性飼料添加物を含まないもの）
出荷前2週間	ニンニク粉末(商品名「フジガーリックA」)を0.3%添加

3 あすなろ卵鶏の飼育管理

- (1) 鶏舎構造：卵質を高めるため、開放式平飼い鶏舎を推奨する。
- (2) 飼育密度：成鶏で1㎡当たり5羽以下とする。
- (3) 飼料給与：発育段階に応じて、養分要求量を満たす採卵鶏用配合飼料を次のとおり不断給与する。

給与期間	配合飼料の種類
え付け～4週齢以内	幼すう育成用
4週齢～10週齢以内	中すう育成用
10週齢～産卵開始前	大すう育成用
産 卵 期	成鶏飼育用

草地・飼料作物

1 牧草の生育状況と今後の管理

- (1) 牧草の作況情報（5月25日刈取り、定期刈り調査）

(cm、kg/10a)					
調査項目	本年	前年	平年	前年比	平年比
草丈	99	103	89	96%	111%
乾物収量	456	434	402	105%	113%
生育ステージ	出穂～出穂揃期	出穂～出穂揃期	出穂期		

注) オーチャードグラス（利用1～4年目の平均値）

消雪は平年より4日程度早く、少雨傾向であったが、気温及び日照時間は平年より高く推移し、温暖で牧草の生育に適した気象であったことから、乾物収量は平年比

113%となった。

(2) 1 番草の収穫及び追肥

ア 1 番草の収穫は、できるだけ開花始期までに終えるよう、天候を見極めながら刈取作業を進める。

イ 2 番草の収量を確保するため、刈取後は速やかに追肥する。施肥量が多すぎると、株枯れの発生や硝酸態窒素の蓄積につながるため、追肥量は 10 アール当たり窒素 6 kg を上限とする。

(3) アワヨトウの早期発見と対策

ア アワヨトウの第 1 世代の幼虫は 7 月中旬まで発生するおそれがあるので、注意が必要である。アワヨトウは、新播草地や 1 番草の収穫後間もない再生初期の若い牧草に発生しやすく、また、ほ場の中央部での発生が多いので、草地を入念に見回り早期発見に努める。この際、幼虫が黒色を呈する場合は発生密度が高いので注意する。

イ アワヨトウが多発した場合は次のような対策をとる。

- ・刈取りが可能な草地は直ちに収穫する。
- ・刈取期に達していない場合は、スミチオン乳剤 1,000 倍液を 10 アール当たり 100 ～300 リットル散布する。若齢のうちに散布すると効果的である。ただし、スミチオン乳剤散布後 14 日間は牧草の収穫及び放牧ができないので注意する。

熱中症対策

1 熱中症予防運動を展開中！（6月1日～8月31日）

- （1）これからの暑い季節は、農作業中に熱中症になるリスクが大きくなるため、こまめな休憩と水分・塩分補給を行い、1人での作業はできるだけ避ける。
- （2）めまいや立ちくらみ等の熱中症の疑いを感じたら、作業を中断し、涼しい場所へ移動し、衣類をゆるめ、体を冷やして体調の回復に努める。

詳細は「農ナビ青森 熱中症対策」をご確認ください。

(<https://www.nounavi-aomori.jp/farmer/archives/16345>)

ツキノワグマ 被害防止対策

1 ツキノワグマ出没警報発令中！！（4月20日～11月30日）

- （1）1人での作業をできるだけ避け、ラジオやクマよけスプレーを携帯するなど、人身被害の防止に努める。
- （2）野菜・果実等の収穫残さや弁当の空容器などは、クマを引き寄せる原因となるため、農地に放置せず、適切に処理する。
- （3）農地周辺の藪を刈払って見通しを良くすることで、クマの隠れ場所を無くし、クマが農地に近づきにくい環境を整える。

詳細は県ホームページをご確認ください。

(https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kankyo/shizen/kuma_cyuuui.html)

農業保険

1 農業保険（家畜共済・収入保険）などに加入し、様々なリスクに備える。

（1）家畜共済

- ア 死亡廃用共済：家畜が死亡、廃用となった場合に、家畜1頭ごとの資産価値を補てん
- イ 疾病傷害共済：家畜が疾病、傷害をおった場合に、診療費の9割を補てん

（2）収入保険

農業者の経営努力では避けられない収入減少を、直近5か年の収入を基準に補てん

2 農業保険には、加入資格者の要件や事故除外方式があるほか、牛マルキンや加工原料乳生産者経営安定対策など同時加入できない制度があるため、詳細は近くの農業共済組合へ相談する。